慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	和宮様之御生涯(樹下快淳著, 人文書院發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.3 (1936. 11) ,p.143(507)- 144(508)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19361100-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西洋史部にあつても『我國の西洋史研究者が一應知らねばならぬ西洋史關係の文獻』(西洋史凡例一頁)を收めたとある。この方面の學問は西洋が先進國なることのために、便利な參考書が揃つてゐるので、編纂者には痛し痒しといふ所があらう。從つて我が西洋史學の幼稚なことを理由として『此の書目には「根本史料」と呼ばれる當代の記錄其他を殆んど含んでゐない』(同上)ことは許さるべきであらう。編者自からも『印刷成れる今日全編を回顧して多々不滿の點を見出す。目立つた所を擧げても、編者が弱年非力なるため書目の選擇及び分類を誤り、當然收められる可き名著を落したり、見當ちがひの項目中に收めた可能性がある事、所謂歷史的名著に主力を注いだ結果、現に活用せる著書—殊に近年刊行された著書—に對して調査不充分なりし事、又、社會經濟史文獻を多量收錄した結果、從來最も豐富なる文獻を有する政治史並びに文化史、特に後者の文獻が手薄となつた事等々に氣付く』(同上三頁)と言はれてゐることは全く同感である。しかしかく言はれてゐる點にその努力の跡が示されるものと見てよからう。

我國の出版界の事情に通ずるものはその全責任を筆者に課する譯には行かない。その眞の缺陷については何人よりも先づ編者自から注意されてゐる點があらうから、歷史學研究に於けるが如き苛酷な非難は差控えるべきであらうが、たゞ再版訂正の場合のために、頁をめくつただけで氣附いた處を一二擧げて見れば、

一頁下段 Glotz グロッツはフランスではメス (Metz) と共にグロスと讀みさうである。

三二頁 Lange の唯物論史には川合博士その他の邦譯がある。

三三頁上段 Ritter の書名は全部詳しく擧げれば幾分解題の助ともならう。

三六頁に Breasted, Ancient Times 新版は是非入れてほしかつた。その他入れて貰いたい書物は隨處にある。(フランス革命については本誌別欄拙譯參照) Fustel de Coulanges, Halévy など一般に佛國史家が無視されてゐるのはどうしたことか。H. Berr, L'Evolution humanité の如きは英譯も平行して刊行されてゐるのだからも少し注意さるべきであつたらう。

一三七頁下段 Burckhardt のルネサンスには、諸種の版本の外二種までも繪入りの大版が (Kröner 及び Phaidon) あることは本書の性質上附加すべきであらう。

一三八頁上段 Fueter には佛譯その他のあることも獨語のよめない人に敎ゆべきであらう。こんなことを序次なく述べてゐたらば限りがないが、再版の節には一層努力の拂はれんことを希望して已まない。定價五圓 (間崎万里)

和宮樣之御生涯 (樹下快津著 人文書院發行)

著者は維新史の權威であつて、夙に和宮の御婦德を敬仰し奉り、數〻講演或は著述により其の御事蹟の宣布に力められてゐる。今次既刊の「和宮樣の御一生」と題する著書の缺を補うて印行せられたものが、卽ち本書である。行文は平易簡明で年少者の通讀に留意せられたが、亦研究家の便を考慮して多數の參考史料を附錄してゐる。

和宮は仁孝天皇の第八皇女、親子内親王で、將軍德川家茂の夫人である。其の御生涯は僅か三十二歳の短日で、然も其の間、所謂國家多事波瀾曲折多い世で、終始血涙史であつた。卽ち勅命を奉じて、國と民との爲めならばとの御詠を殘し固い御決心を以て關東に降嫁あるや、御同棲は僅かにして夫家茂の陣歿に遭ひ、後、靜寬院宮と號して貞節變ることなく、朝夕其の冥福を祈り、更に幕府滅亡の悲運に際會しては毅然たる御覺悟を以て、江戸城を寸分たりとも離れずして、只管婚家德川氏の社稷の安寧を歎願せられ、其の至念遂に達して、江戸城池の明渡は談笑歡語の裡に無異行はれ、圖らずも城下百萬の人命財産は完うされ、其の救國的功績は永遠に青史に炳爛して不朽である。

最後に筆者は著者に多年知遇を辱うするを敬謝し肯て江湖に本書の一讀を薦める。（武田勝藏）

戰國式銅器の研究（梅原末治著　東方文化學院京都研究所）

パリの骨董商ワニエック氏に依り山西省の李峪より齎らされた支那古銅器の一類は爾來秦式銅器として歐米の蒐藏家の注目するところとなつてゐたが、著者は往年の外遊に際し、此の遺品に興味を持たれ熱心に資料を蒐集され、その調査の結果は本誌十卷三號にも「所謂秦銅器に就いて」として發表せられ、また十一卷三號餘白錄にも李峪の位置を補正されてをる。此等の研究を昭和七年度研究所の報告として「所謂秦銅器の研究」と題し纏められて提出されたものを今回更に修正して印刷されたもの卽ち本書である。

李峪の遺物は一九二三年の初め暴風雨に依つて崩れた斷崖から偶然發見された窟の中から發見されたもので、當時包頭にゐたワニエック氏は直ちに同地に來り私人に隱匿せられてゐた青銅品類を買ひ集めてパリに齎したものである。本書の註の中に梅原氏は、ワ氏が著者に宛てた手記を發表され、當時の發見の狀態を一層明かにされてをるのは悦ばしい。勿論ワ氏の手に歸したもの以外當時官憲に沒收され今日太原に保管される一群、及びその他に散佚した遺品あり、著者は手の及ぶ限りその寫眞を集め之を精巧な圖形を繰返して繁褥な圖文を作ることであり、また金錯並に硯石の技術などを伴ふてをることである。著者は更に同類の遺物の各地に發見された例を說き、その樣式が殷周時代と漢時代との中間に位するものなることを明かにし、之を戰國式銅器として呼ぶべきことの妥當なることを提唱し、更にかゝる新樣式の發生の因に西方よりスキタイ文物の影響あることを推察されてをる。

本書が戰國時代文化の一研究として一つの指導標を確立したものであることは何人も認めなければならぬだらう。一體支那の文化領域は極めて廣大に汎り、その一局地の發見から同時代の全貌を推察し去ることは極めに困難であることはいふまでもない。然し乍ら支那の考古學的發見は從來多くの場合偶然的であり、遺物は直ちに散逸し去ることが多い。著者の如き精勵なる考古學者が四方に分散した一括遺物を全世界に汎つて調査され、その資料を一册に蒐錄され、出版せられることはまことに學界の爲に感謝す